

ロマンスなんか、  
いらないッ！



田所 稲造

## 登場人物設定

---

### 登場人物設定

望月 雅美（もちづき・まさみ 女性）16歳。別名「望月雅美A」。いつの間にかそこにいたから。

望月 雅美（もちづき・まさみ 男性）16歳。別名「望月雅美B」。すでにそこにいたから。

いずれも、望月家の一人っ子。一人しか産んでいないはずの母親は混乱をきたし、父親は「学費が倍になる」と嘆く。並行世界から来た望月雅美Aと、一緒に暮らすことになった、望月雅美B。異性だけど他人じゃなくて、でも、恋人ではなくて自分だし……といったドタバタコメディ。なお、「お前がオレで、オレがお前で」という性転換ネタは使いません。

望月 和俊（もちづき・かずとし）雅美の父。「学費が倍になる」と嘆くサラリーマン。

望月八重子（もちづき・やえこ）雅美の母。異性の娘が来たことで、混乱している。

（室山県立香枚井高等学校のご学友）

江口 寿能（えぐち・ひさよし）16歳。通称「えぐっちゃん」。熱血漢。

吉沢 浩（よしざわ・ひろし）16歳。江口の暴走を止めるストッパー役。化学、物理好き。

秋本美也子（あきもと・みやこ）16歳。特に女性の雅美のお友達であり、良き理解者。

## 第1話 朝っぱらから何の騒ぎだ！

---

そこには、レースのカーテンだけが掛かっていて、窓の外ではいつもより多くのトリさんがさえずって、うるさくて眠れない。だから予定より早いけど、目覚まし時計を解除……あ？

何だか今日は天気がいらしく、いやに日差しがきつい。カーテン越しに鳥が、いつもの倍ぐらいピーチクパーチク鳴いていて、うるさい。何だ、1時間早ええのか。目覚ましを……。

ぴと。

「うおッ？」「ひゃ？」

オレの指に一瞬、電流が走ったかと思った。ボタンにしては意外な皮膚触覚だった。傍らにはパジャマ姿の知らないオンナが、オレと同時に目覚まし時計に手をかけようとしていた。しかも、息のかかる至近距離で。

あんた、ダレ？ ナニ者？ まさか、寝込みを襲……（とっさに下腹部を確認）……うげ！  
やだ、まさか、そんな！

「い、い、いやあああああああー」

「ま、待て！ ごっ、ごっ、誤解だ！ これは何かの間違いだ！」

オレは何だか解らないうちに、まず右の頬を鋭利な爪で引っかかれた。両手でベッドから床に突き飛ばされ、後頭部を打って油断しきったところへ、いきなり素足で急所を踏みつけられ、朦朧としていたところでそいつに尻を何度も蹴飛ばされ、いつの間にか、マンションのドアから転がるように叩き出されてしまっていた。

こういう目覚めは生まれて初めてだった。しかも、何でオレは自分の家の前の廊下で、こんなヒンヤリとしたコンクリートの上で風に吹かれているんだろう。どうして、朝から自分の部屋を叩き出されなければならないんだろう……考えれば考えるほど、訳もなく理不尽な気がした。

「バアアアンッ！」

「うううう……………」

きつく閉じられた鉄製のドアの前で、理由もなくぼおおおっとせざるを得なかった。

「ガチャ……ガアアアン」

「うぁ痛ッ！」

おもむろに、内側から前触れも無しにドアが開いた。オレの後頭部はさっきから打撃を受けっぱなしで、すでに何億個かの脳細胞が死んでいて、もう再起不能になっているかも知れなかった。

「ご、ごめ……」

「ごめんって、あのなあ……だいたいお前、ダレ？」

「あなた……こそ……」

私がさんざん蹴飛ばしたり踏んづけたりしたそいつ。私がこの部屋に迷い出た、もしくは迷い込んだらしいことを、見渡したその部屋の調度品で知ることになった。たとえば、昨夜、お休み前に見なかったアイドルのポスターとか、ダンベルとか、男性化粧品の匂いだとか、さりげなく積まれたエッチい本だとか……。

全然自覚がない。なぜなら自分から進んで男性の部屋へ行った覚えがない。昨晩は、窓から見る景色とか、柱とか壁とかはいつもと同じで、何故か調度品だけがそっくり男性用のそれに入れ替わっていた。私は恐る恐る、その、叩き出したそいつに向かって、彼の名前を訊いてみることにした。

「オレ？ ちゃんと書いてあんだろー！ 望月雅美！」

表札には確かに「505 望月」と書いてある……。

「奇遇ね、私とおなじ……って、あのねえ！ マネしないでくんない？」

「お前なあ！ そんなにビシッと指差してオレに向かって威張んなよ！ これはマジで17年前からオレの名前だ！」

「私は生まれてこのかた、ずーっと望月雅美だって！ だいたい、いきなり現れて、夜な夜な私の部屋を無断で模様替えしないでくれる？ 部屋乗っ取っておいて、あなたいい度胸ね！ 私はアンタと添い寝してあげた覚えはないッ！」

「だからあ！ いきなり現れたのはお前だ！ お前なんだって！」

「まったくもう！ ……寝込みを襲った上に、ウソまでつくなんて、あんたいい加減、卑怯で腐りきった下半身してるわねー！」

「待て！ オレはどこも腐っちゃいねえや！ オレはただ高校から帰って来て、疲れてそのまま眠ってだ！」

「訴える……」

「何で？ オレが？ 何の罪で？」

「……そういやあそうね。ああ、もう、わかんない……。ラチあかない……。とにかく中へ入りなさいよ、朝からみっともない」

「……だいたい、叩き出したのはお前のほうだろうが！　っつー、まだ痛てえ」

少し華奢な印象を受けたが、背格好はオレと同じぐらい。同じところにホクロがあって、同じ色の髪と同じ色の瞳をしているものの、そいつにはいっちょ前に胸元に乳房がついていて、あるべきはずのところには、どうやら何もついていなさそうだった。いったい、何がどうなって……。

何だか知らないけど先住民気取りよねー。どーしてこうなったか問い質してやる。それにしても……私はずううっと一人っ子だったし、こいつ兄でも弟でもない。私がオトコの部屋に侵入したワケでもなく、こいつが忍び込んで来た、というワケでもなさそう。だったら、朝から何がどうなってるんだか……。

「頭イタイ……」

「オレも……」

硝子のはめ込まれたテーブルの前で、何だか急に家族会議っぽくなってきた。オレはとりあえず女性に見せて刺激がヤバそうなブツは全部クローゼットに放り込んで、ゴミを片づけた。とりあえずGパンをはかせて、Tシャツを着せた。彼女はとりあえずTシャツを2枚要求した。重ね着するらしい。

「室山県立香枚井高等学校普通科2年C組……なにもそこまでマネしなくたっていーのに」

「マネじゃねえよ。それにお前、なんでそんなにオレの身辺知ってるんだ」

「こっちが訊きたいって」

「親が同じで子供がひとりだったら、生年月日が同じなはずネエじゃねーか。だいたい……」

呼び鈴が鳴った。これは非常にまずい！　ど、どう説明すれば……。

呼び鈴が鳴っている。彼はいったい、私をどうするつもりなんだろう……。

「のぞいて見てごらんなさいよー、ダレが来てんのよー」

「……」

江口、吉沢、しかも美也子まで……ああ、よりによってこんな時にあいつらああー！

「いったい、ダレ？」

「えぐっちゃんと、ヨッシーと、みやこ」

「あ、あたしメチャ×2知ってるううー！」

「でも彼らはお前のこと、多分知らないと……」

「えー、なんでよー！ 私の友達じゃんかー！」

『いねえのかー』 ダン！ ダンダン！

「はああい！ ドアを叩くなっつーの、ったく！」

逃げ場をふさがれて、ベランダは無いし、トイレだってすぐにバレる……クローゼットしかない。ここへ彼女を押し込めるしか……。

「ご、ごめん！」

「おわ！ いったー！ 何すんのさー！」

「しーつつ！ 隠れろ！ いいから、さあ！」

「入れ？ って、なにここ！ 狭いし汚いし！ いいワケないってばー！ な、納得できーん！  
むぎゅ」

「とりあえず押し込めて……」

”むんぐうう……うっぎゃー……ドタバタ……”

「騒ぐな！ 暴れちゃダメだ！ なあ、落ち着けて！」

”くしゅ……ぐす……”

「泣くな！」

”ふへへへへ……”

「だからって笑うなよ！ 不気味だ！」

『おーい、開けないと、ここ、ぶち破るぞおおお』

『望月クン、生きてるう？ おはよー』

「ああ、いま開ける！ ちょっと待って！」

「ういーっす！」

「よ、よお！」

「おはよう！ 学校にも来ないし、携帯にも出ないからどーしたかと思った。なんかの病気？」

「ああ、ちょっと……」

「なんだ……生きてんじゃんか」

「上がらせてもらっていいかなー」

「あ、ああ……」

「まあ、アイスコーヒーしかねーけど」

「サンキュ」

”ゴソッ”

「ん？ 何だ？」

「あん？ ああ、気のせい、気のせい……」

”うあ、痛……”

「女の子の声……？」

「テレビじゃねーかな、多分。あ、ほら、これこれ。動物王国じゃん……」

”meon…… meon……”

「なんだ、猫かあ」

「そんでさー、橋本のヤローがさあ」

「あはははは」

”……”

やがて。クローゼットへ無理矢理押し込んで事なきを得たはずの、ゴミとか、見られて非常にツライ書籍とか、そういった類のビデオとか、DVDとか、ゲームソフトとか、空き瓶とか、食べカスとかと一緒に、今日彼らに一番見せたくなかった彼女が、その重みに耐えかね……

”んが……”

バアアアアン！ ガン！ ガンガラガッシャーン！ カン、カラン……。

「うおッ?! 何だあ？」

「すげえゴミ……い、いー？」

「ちょっとなに、このひと！」

「ふみゅうううう……」

「あ、うああ……」

バレちゃいけない事に限って、絶対にバレちゃいけない、非常にマズいタイミングを見計らって、往々にしてバレることって、よくある……。

「望月……ダレなんだ、彼女……」

「は、はじめまして……私も望月雅美っていいます……彼だけはどうか……責めちゃ……ダメ……あ、あう……」

「私も？ ……『も』って、ナニ？」

「気絶……って、ヲイ！ しっかりしろー！」

「望月って、キミの名前じゃなくてあいつだろ！ おーい！」 ペチペチ……

「どーいうこと？ コレ！ 女の子の監禁じゃない！」

「冗談じゃないぞ望月ィ、見損なったぞ！」

「ちち、違うんだ！ 聞いてくれ！ これには深〜いワケがああ！」

いつの間にか、楽しいはずの場が、すっかり「男、望月雅美を糾弾する会」と化してしまっていた。何だかみんな、腕組んでるし……険悪な雰囲気で見つめてるし……囲まれて逃げられないし……。

「要するにだ。お前は、彼女が『異性の自分』ではないかと、そう言いたいんだな……」

「そうなんだ。昨日の晩はひとりだったし、あれからドアだって開けてない」

「じゃあ、オトトイの晩に連れ込んだんだらう！　そうに違いない……お前というヤツは！」

「ちっ、違う！　くっ、首を絞めるな！　そーじゃなくて！　お前らが来る直前に、ヤバいと思ってオレが押し込めたんだ……つい……」

「け……汚れ無きいたいけな婦女子をだなー、くおおんな不潔極まりないところに押し込めて…  
…お前というヤツはああー」

「ぐ、ぐげええーっつ！」

「まあまあ、えぐっちゃん。いーからそれぐらいにしなよ……雅美が、白目剥いてるぞ」

「だいたいだ！　警察沙汰にしないだけでもオレさまのせめてもの菩提心というもの……これが手加減せずにいられるかああああー」

「だわああああー」

耳許で怒鳴られ、首を絞められ……やること為すこと全部オレの所為にされるし、ああもう、何だかわからん……誰か教えてくれ……。

「ん……んあ……」

「あ、彼女、気づいたみたい……大丈夫？」

「う、うう？　あ、ああ！　ひ……ひいいいいーん」（泣）

「辛かったでしょ……もう大丈夫……」

「みやこ、みやこ……こ、怖かつ……うっ、うえええええーん」

「！」

へへ。みんな驚いていやがる……お、オレが正しかったんだ……。

「ねえ、ちょっと……」

「いま、彼女、なんつった？」

「確かにみやこ……って、私のこと……」

「つまりだ。彼女は初対面の秋本の名前を知ってる……ってことは……」

「な、なんだよ」

「これは一体どういうことなんだ！　吐け！　いますぐこの場で洗いざらい吐け、吐くんだああああッ！」

「お、オレに訊くなああああ！　わからん……ぐ、ぐ、ぐるじい……」

「えぐっちゃん、ああ、えぐっちゃんマジ入ってる……リリース、リリースね。どうどうどう……」

「んはっ……はあ、はあ、はあ……」



これで少しは楽になった……と思ったら大間違い……。

「彼女は、お前になんつった……」

「はあ？」

「彼女自身の名前を名乗ったかーってことだ！」

「そ、そんなに詰め寄るな、暑苦しい……そ、そういやあ、自分で望月雅美と名乗ってたな……  
オレと同じじゃねえか、って、口論になって、それから……」

「ひっ、ひっ、ひえええええーん」

「何か思い出したのね、よしよし……」

「あんなに怯えて……まさか、それから、良からぬことをしたと言うのではあるまいな！」

「ちち、違う！　いくらオレでもそこまではしないッ！」

「あの一、えぐっちゃん。オレ前に、どっかのWebで見たことあるんだけどさー」

「？」

「量子力学のWebだったか……多世界解釈という考え方があるんだ」

「もう少しかみ砕いてくれ……何だ、その世界なんとか……」

「理論上……並行世界、つまりパラレルワールドって一のが、現実問題として実証されていない  
んだが、これがあながち、理屈の上では考えられなくはないらしいんだ」

「難しいことを言うなよ。それ、どういうことだ」

「うーん、どう言おう。説明し始めると、それだけで一冊の本が書けちゃうから……」

「勿体つけてないで教えろよ」

「……この場合、過去に望月がオンナに生まれていたかも知れない時間軸が現にあったとしてだ。  
。こことは別な時間軸が存在していたとしたら……この密室での事件がすべて説明できる」

「……この子も、望月雅美”ちゃん”ってこと？　うそッ！」

「そう考えるしか、もう説明がつかないだろう……他にどう説明するよ……」

「つまりだ……。あの娘は、異性の望月、オンナの望月自身だとでも言いたいのか？」

「そういうことだ」

「こ、このこのこの！」

「何すんだ、ぐえ！」

「この非常時に、デマカセを言うなあああー！」

「デマカセじゃない、本当だ……離せ！　こ、今度はオレの首が、ぐげれえげげげ……」

「あいつが昨晚、近隣の女子寮に忍び込んで、甘いコトバをささやいて、夜な夜なここまで拉致  
してきたに違いない！　このシチュエーションだったら、もはやそうとしか考えられん！」

「あのなあ！　オレはそんなことも、あんなこともやってない！」

「当事者は黙ってる！」

「当事者だから言わせてもらおうんだ！」

オレって……えらい言われようだなあ……幾らなんでも……。

「違うの……彼はそんなこと……してない……」

「なにー？ だいたいだ！ 違うかどうかは、女の子本人から訊かなければ解らんだろう…  
…あ？ 本人？」

とにかく、異性の自分が現れた、という現実を目の前にして、近所のスーパーで、女性特有の身の回りの品だとかを友人たちと一緒に購入しに行くことに決めた。

「今日は学校はおやすみね、結局」

「二段ベッドが要るなあ」

「お前が決めるなよ」

「じゃあ、この雅美ちゃんと望月クン、今日から添い寝するつもり？」

「何！ 添い寝だと！ ゆ、許さん！ 断じて許さあああん」

「まあ、落ち着けえぐっちゃん。ここは公共の場所だからな、どうどう」

「こ、これが落ち着いていられよか！ 断じて二段ベッドにするんだ、いいか望月ィ！ バイト代だってしこたま余ってるだろうがお前は、あー？ 男女席を同じうせず」

「おい、いつの生まれだ」

「本当は部屋を分けるべきでしょうけど、一部屋じゃあこれしかしょうがない、ってワケ」

「待て、勝手に……」

「いいから払え、おとなしく」

「3万8千円に消費税と送料……とほほ……」

「スナック菓子ぐらいなら差し入れしちゃう、飢えるこたあない、心配するな。なあ、泣くな望月」

「……」

かくして、急遽家具売り場で高額な二段ベッドと、香枚井高等学校の女子制服やカジュアルや、なんじゃかんじゃを買う羽目になり、オレはベッドの上段、彼女はベッドの下段で眠ることになった。つまり、二段ベッドの階段の所有権は彼女にあり、絶対にオレを夜な夜な着地させない、間違いを起こさせないように、オレの知らないところで、オレの知らない生活の段取りが、オレの許可なくちゃっちゃと決定づけられていった。

「何だか、急ににぎやかになったよね」

「ええ、まあね」

「何他人行儀になってんの雅美！」

「あ、秋本さん？」

「美也子でいいわよ別に、堅くなんないで、リラックス」

「は、ははは……リラックスねえ」

「友達、まだでしょ。なってあげてもいいよ」

「本当？ あ、どうも、照れるなあ」

夜は更けた。みんなは帰った。夜、美也子のパジャマに着替えた異性のオレが、ユニットバスの折り戸を開いてこちらに歩いてきた。

「ねー雅美さん」

「んだよ」

「変なことしないでしょうね」

「お前に欲情するのは、ひいては、異性のオレに欲情するのと同じ。だから自慰行為と変わらん。興味ないね」

「うそばかり」

「って、お前ー！」

「何顔赤くしてムキんってんのよ。ガキー、子供ー」

「あー、くそ、もう寝る！」

「あ、そ、おやすみ、片割れ」

「か、片割れって……」

「はしご、取るわよ」

「とれよ勝手に」

「変なことしたら、下から刺してやる」

「あぶねえなあ」

部屋の電気がすっかり消えた。どうやらオレの混乱も最高潮のようで、二段ベッドのはしごが取り外されていることを忘れて、危うく落下するところだった。危ない危ない……オレは何だか仕組まれた筋書きの中で、なぜか理不尽な気持ちを砂のように噛みしめていた。が、睡魔が、オレを包んで……。は一、明日どうなるんだか。

## 第2話 朝っぱらからどういうこと？

---

朝が来た。さて、変態もまだ寝ていることだし、そろそろ着替えるか。こっそり、こっそりと。物音を立てないように……。あれ付けて、これ履いて、それからそれから……。ジロツ。……。あの変態、実は起きてるんじゃないでしょうね。危ない危ない。スカート履いて、さっさとブレザー着ようっと。……。はい、お着替え完了！ さて、今日も頑張るぞっ！

朝が来た。朝が来たのはいいけれど、女子のオレが、目下、着替え中だった。ブラジャーにパンティー。不覚にも、オレは下着姿の女子のオレを見てしまったのだ。ちょっとだけだけど。いかん！ オレのノズルが過敏に反応している！ あんなもので勃つな！ あれは、そもそもオレだ！ 目をそむけろオレ、静まれ、静まるんだー！

「ちょっと！」バシッ！

「むむ、むがっ？」

「いつまで布団に食い付いている気？ 起きなさいってば、ほら！」ベチベチ！

「むがっ！ 痛てえ……」

「起きた？ いや、すでに起きてたのね……って、きゃあああ！」

「む？ どうした、片割れ？」

不覚にも、オレのノズルが「モーニング・スタンドアップ」しているところをクッキリ見られてしまったのだった。パジャマなので、それはもうシルエットがクッキリと。まずい。これでは、また誤解を招きかねない。何とか言いくるめようか。

「そんな……信じらんない……」

「ああ、これ？ これは男子特有の生理現象でなあ……」

「い、いやあああああー」

「ぐおっ！？」

肩をつかまれたと思うと、どっしーん、とベッドの二段目から床に叩きつけられた。まるで頭から階段を転げ落ちるような感覚だった。そして異性のオレは、勃ち上がっているそれを、容赦なく何度も踏みつける！ 痛い、痛いよう……。もう折れちゃうかも。

「のぞき！ 変態！ この！ この！ このー！」

「やめろ！ 痛い、痛いってば、やめろおおおー」

馬乗りになって、往復ビンタを何度も放たれて、すっくと立ち上がったかと思うと、オレの尻や背中を容赦無く蹴り飛ばし、顔でドアをぶち破った。打撃で、鼻血が出たかも知れない。そ

こへ、異音を聞きつけた親父とおふくろがやって来た。

「おい、雅美！ 朝っぱらから何の騒ぎだ！」

「まあまあ、どこのお嬢さんかしら……」

「今日からお世話になります、望月雅美です」ペこり。

「これは素敵なお嬢さんじゃないか、母さん。名前が、望月雅美さんだって。可愛いお嬢さんだなあ……って、ええーっ!？」

「じゃあ、ここに血だるまになっているこの子も、望月雅美よねえ……」

「私の着替えをのぞいていましたので、制裁を加えていたところです」

「このエロガッパが！」

「まったく……」

「でも、お前、確か、ひとりしか産んでないよな？」

「こちらも雅美ちゃん、これも雅美……一体全体どうなって……くらっ……」

「か、母さん！ 気確かにかに！」

「じゃ、じゃあ、雅美ちゃん？ 一緒にご飯でも召し上がれ」

「はあい」

「な、何かおかしいけど、まあ、母さんが納得してくれたなら、オレも納得しよう。さあ、雅美ちゃん、こっちへ来て朝ご飯だぞー」

「……って、簡単に受け入れすぎだぞ！」

「雅美！ あなたも、早く制服に着替えなさい……」

「はしたないぞ雅美！ ささ、雅美ちゃん、どうぞ食卓へー」

「はあい」

「はあい、じゃねえ！ 素直に受け入れ過ぎだろ！ オレの立場は……ちくしょう……」

何故か自然に、にこにことした団らんが始まり、わたしは自己紹介することにした。

「昨日の晩に、こちらの世界へ来た、望月雅美です。よろしくお願ひします！」

「あ、ああ、何のことやら分からんが、ともあれ、よろしく！」

「ま、雅美ちゃん、トーストが焼けたわよー」

「はあい」

なんだ、この自然な空気！ オレは納得いかん！ オレはようやく自室で詰襟に着替えて、食卓に座った。どっこいしょ。

「なあに？ 邪魔する気？」

「ここはオレの椅子だって！ ちったあ譲れよ！」

「あんたがどきなさいよ！」どーん！

骨盤の大きさの違いか、あいつの尻の圧力に負けて、台所で寝転がるオレ……とほほ。立つ瀬なしか……。

「この人、私を見て朝から欲情してるんですよ！ もう、信じらんない！」

「うん、まったくだ！」

「第二次性徴の頃からあの子はこれだもの……それに引き換え雅美ちゃん、利発そう！」

「ありがとうございます！」

「って、おい！」

床に正座して、ボコボコあざだらけのオレは、冷めたトーストを水で流し込んでいた。何だろう、この違い……。この扱い……。

「行って来まーす」

「ああ、行っておいで」

「行ってらっしゃい！」

「……」

「雅美！ 何とか言ったらどうなんだ！」

「別にー」

「まあ、なんて不躰な子！」

「まったくだ！」

「いいよ、いいよ、どうせオレなんか……」

これが「傷だらけの人生」って奴か……とほほ。

「片割れー、おそーい！」

「う、うるせえなあ！ しょうがないだろ？ 朝からボコボコにされて」

「自業自得！ さあ、とっとと歩く！」

「あ痛っ、尻を蹴るな！ 尻を！ パンツ見えるぞ」

「はッ！」

「それ、見たことか！ ざまあ！」

通学路に、いつもの通り、毎度おなじみの、えぐっちゃん、吉沢、美也子が待っていた。

「美也子、おはよう！」

「あ、雅美ちゃん、おはよう！」

「チョリーッス」

「なんだ、お前も来たのか」

「当然だろう？」

「ねえ、美也子、片割れったらね、朝から……ひそひそ、ひそひそ」

「えー！ 何ですって！ 朝っぱらから、あんたの着替え見て、勃起ー？」

「シーッ、声がでかい、声が！」

「何だと、おい！ 聞き捨てならんなあ！」

「ああ、またこの変態が何かしでかしたのか……」

「そうなの！」

「くおら望月！ お前という奴はー！」

「ぐぐぐ、ぐるじい……首が締まる……」

「えぐっちゃん、遅刻するぞー。そんなもん放っとけ」

「仕方がない」……ドサッ。

「はー、はー、はー……朝から激しいなあ、えぐっちゃんは」

「これは体罰だ！」

「体罰って、ダメじゃん！」

「ちょっと！ あんたたち、置いてくよー！」

「オレとしたことが……こいつらと漫才している場合じゃなかった。行くぞ」

高校の昇降口。わたしは生徒手帳をもらわなければならない。名前があいつと一緒に、何か嫌よね。どうなることやら。

「ねーねー美也子！」

「なあに？」

「生徒手帳、もらわなきゃだね！」

「そう！ それ気になるー！」

「名前の欄に、なんて書いてあるんだろう……」

「こいつと一緒にされたくはないよねー」

「こいつ、って何だよ！ オレも激しく気になるよ！」

「望月の出席番号とか、座席とか、どうなるんだろう」

「オレは隣同士は許さんぞ！」

「いや、パラレルワールドは、何がどう絡んでいるか分からんからな……」

「事務室行こうよ！」

「賛成！」

「オレらも続くぞ！ 行け、望月！」

「あんまり乗り気じゃないけどな、とりあえず生徒手帳っと」

事務室のガラス戸をノックした。事務職員さんが出てきて、待ってましたとばかりにガラス戸

が開いた。わたしたちの生徒手帳を交付するために、スタンバイしていたようだった。

「あら？ あなた新顔ね。もしかして、女子の望月雅美さん？」

「はい、初めまして……」

「じゃあ、新しい生徒手帳。これ使ってくれない？ 便宜上、女子の望月さんには『望月雅美A』としてあるから」

「Aですか！ どうしてまた？」

「レディーファーストということね。そこの、男子の望月くん？ こっち来なさい」

「へーい」

「便宜上、男子の望月くんには『望月雅美B』としておいたから。この手帳を引き取って、新しい手帳。Bでごめんなさい」

「Bって何だよ！ B級って事っすかー？ 何か釈然としないなあ」

「文句言わないの！ ささ、あなたがた、早く教室へ行かないと、遅刻するわよ！」

一同「はーい」

階段を歩く最中でも、片割れの雅美は、皆にいじられている。わたしは、クラスでどんな扱いを受けるのだろう……クラスみんなは知ってるけど、みんなはわたしと初対面なのよね。ああ、ドキドキしてきたー。とりあえず、自然に挨拶して……っと。

「みんな、おはよう！」

「おはよう、望月A！」

「望月A？」

「前からそう呼んでなかった？」

「そ、そうね……おはよう！ ……で、わたしの席は？」

「望月Bの前……」

「ええーっ！？ あいつが後ろー？ また何をされるか……」

「それもそうね」

「先生に席替えをお願いしなくちゃ！」

「あいつは危険よ！ 性犯罪者スレスレの欲望一直線人間なんだから！」

「うん、朝からそうだったから、蹴飛ばして制裁を加えたところ」

「その方がいいよー」

「存在そのものがセクハラだもん」

その会話に気づいた望月雅美Bが、弁解を求めた。

「ち、ちち、違うって！ オレにそんな設定ねえよ！ 実に健全な高校男子だ！」

「なーに言ってんだか……」

「毎日毎日、わたしたちに対する目線が良くないよ！」



「三百六十五日、毎日欲情してるからね。雅美Bを、一番うしろの席に就かせる！」

「賛成！ 先生に相談するよ、みんな！」

「気をつけて、望月A！」

扉を開けて、担任の先生が入って来た。早速懇願する雅美A！

「先生、おはようございます。今日からお世話になります、望月雅美Aです」

「はいはい、知ってるわよ、雅美ちゃん！」

「その.....望月Bのセクハラがひどいので、席を一番後ろにしていただけませんか？」

「あなたが後ろに？」

「ち、違います！ あいつをです！ 万年セクハラ人間をです！」

「そうしましょう。先生はそれには賛成です。女子に来てもらって、望月Bくんは交替で、江口くんの隣にしましょう」

「や、やったー！ ありがとうございます！」

「これで一安心ね！」

「ふー、助かったー」

## あとがき

---

2012年3月14日

2002年の作品をWayBackMachineでリムネットからサルベージして来ました。若干加筆修正が加わっていますが（元設定・大学生→現設定・高校生など）。「へー、十年前は、こんな考え方してたんだなー」という率直な驚きと、若気の至りっぷりが満ち満ちていますね。田所、三十一歳の時のものがたりです（第一話のみ、後は書き下ろし）。

2012年3月30日

サルベージしたは良いけれど、あの頃と比べて、後先のことを考えてものを書くようになりました。第2話。女子の雅美は女子の美也子しか知り合いがないので、そこをどうするか。その反応を見て「誰だあの女子」と、男子の雅美は質問攻めに遭うでしょう。担任はどうするのか。相席になるのか。それとも平然と望月雅美A、Bの座席が、何事もなかったように設えられているのか。どうすれば面白くなるかなー。

2012年3月31日（早朝）

漫画だと、すでに馴染んでいるという光景が、あまり違和感なく描けるのですが、文章となると、また勝手が違って来ます。さらっと流すか。

2012年6月8日（早朝）

なぜかこの話を書く時は、決まって早朝が多いです。だいぶん新生活（？）にも慣れてきたようで、次は放課後のコンビニかファストフードでのバイトでのシーンを書く予定でいます。

2013年4月7日 新生活を迎える方も多いかと思います。こちらの小説は踏んだり蹴ったりの新生活ですね。ああ、また年をまたいでしまった……この手の作品はやり尽くされているので、どこで自分らしさを出すかが勝負です。男女の雅美が出て来たのはいいけど、さて、何が売りなのか、がイマイチハッキリしないのです。知の泉が枯渇しそうです。オレがお前で、お前がオレで、というのをやりそうになったのですが、これもまたやり尽くされている。困ったもんです。

ロマンスなんか、いらないッ！

<http://p.booklog.jp/book/13974>

著者：田所稻造

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inazotaddy/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13974>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/13974>